

平成 17 年 6 月 30 日

モバイル社会研究所ワークショップ  
オピニオン・ペーパー  
～ 情報技術進化の歴史から今後を展望する～  
御手洗 大祐

1. 拡張された身体

現在、国際大学 GLOCOM において、「情報社会の倫理と設計についての学際的研究」というテーマで、新しい情報社会のパラダイムを探る研究会が開催されている。先日この研究会の中で、座長を務められる東浩紀氏が、情報技術の発展イメージについてその場を制していたコミュニケーション偏重論に対して、情報技術発展の歴史を紐解きながら、様々な新しい議論の可能性を提起していた。

簡単に要旨をまとめると、現在のインターネットに連なる情報技術発展の契機の1つとして、1900年代の半ばまで進展してきたエネルギーの大量消費を基礎とした輸送技術開発に限界が訪れたことがあったのではないか？というものである。

ヒトは高速・効率的に遠距離を移動することを求めて、原始から様々な仕組みや技術を作ってきたが、そうした技術の発展に伴う環境負荷の限界が1900年代の中盤に訪れた結果として、遠くのヒトとのコミュニケーションが安価にかつ高い臨場感を持って行う技術や、バーチャル・リアリティに連なる技術のように、遠隔地やシュミレーションされた環境を体感できるような技術が開発されるようになったのではないか？という仮説である。これが正当なものであるかどうかには詳細な評価が必要だが、ここではこの仮説を基点として論を展開してみたい。

マーシャル・マクルーハンは「身体の拡張」に当たるものがメディアだと捉えたが、手足の拡張に当たるものが従来の移動手段であったとするならば、そうした方向での発展の限界の結果として現在起きている情報技術の進展は感覚や経験を司る「脳」の拡張に当たるものだとして解釈できる。90年代の後半から起こった情報技術の飛躍的な成長はヒトに多大な影響を及ぼし、人間の情報化への対応によるより一層の脳機能への依存(ここでは便宜的に「脳化」と呼ぶことにする)と、それによる身体性の硬直化や喪失を促進した。特に機能性と合理性を追求した都市部においては、ヒトは情報化の進展や都市の機械化による恩恵を受ける一方で、自身の身体性をより硬直化していくこととなった。

2. 寂しさ再生産的なコミュニケーションの大量生産

脳化が進んだ社会の中にあっては、現実世界との共感覚に乏しいことから生まれる孤独感が深まると同時に、感覚的・身体的なものではない、純粋な情報によるコミュニケーションが加速する。そうしたコミュニケーションの中で行われる、身体性から遊離した直接的なメッセージのやり取りは、付加的な情報(身体や環境情報)を削ぎ落としたものであるため、相手のパーソナリティやメッセージを純粋に理解している、あるいは共感している、という感覚を一時的にもたらす。

しかしコミュニケーションの本質が、メッセージのやり取りの中で言語の中に潜む概念のズレを認識していくことにより、お互いの差異を確認していく行動である以上、コミュニケーションを身体性から離れたところで深めていくことは、一方ではお互いの孤独をよりはっきりとさせていくことに繋がる。その孤独を埋めるために

さらにコミュニケーションを行うという、「寂しさ再生産」的な、非生産的なコミュニケーションが大量に生まれていくことになる。現状の身体性から遊離したメッセージが中心のコミュニケーション環境においては、ヒトの孤独感はより一層深まっていく。

### 3. 身体性の回復と新しいコミュニケーションのあり方

先にも述べたとおり、環境負荷要因から私達は移動した上でのコミュニケーションを実現することは非常に難しい。こうした環境下、情報技術に関する様々なニーズはますます高まる一方、身体から遊離した様々なメッセージを追いかけて孤独感を深めるヒトが増えていく懸念がある。

2030年にはこうした情報技術発展の歴史上の課題が解決されていくのではないだろうか？即ち、何らかの形で身体性を回復しつつ、技術を利用した様々なコミュニケーションをストレスなく行うことが出来る環境が実現されていくということである。

電子的なコミュニケーションを契機に深く自分の中に沈潜していく形のコミュニケーションが増加するのではなく、コミュニケーションの結果としてよりヒトが身体性を意識することが出来るようになるのと同時に、現実世界との共感を取り戻す形でのコミュニケーション様式やシーンが生み出され、有機的にヒトとヒト、ヒトと世界が繋がっていくことで幸福な社会や世界が構築されることが、今後の情報技術の発展の方向性を占う上では大事なのではないかと考える。